

誰が物を渡すのか？

— 多人数会話において物の渡し手が決まる過程の微視的分析 —

門田圭祐(早稲田大学大学院生) 牧野遼作(早稲田大学) 山本敦(早稲田大学大学院生) 古山宣洋(早稲田大学)

本稿は、多人数会話において、物の受け渡しという相互行為を参与者たちが達成する過程を検討する。とくに、受け渡しがなされる前に渡し手が明らかではない場合に、いかんして実際に物を渡した参与者が渡し手となりえたのかについて、相互行為の微視的観察により検討する。

1. はじめに

会話や共同作業のような相互行為は、参与者たちが互いに、発話や動作の微細な調整を行うことで成立している。もし、そのような調整がなければ、同時に複数人が話したり、動いたりしてしまい、相互行為が破綻してしまうこともあるだろう。本稿では、そうした調整の例として、日常的な物の受け渡し場面で、渡し手になりうる者が複数いる中から実際の渡し手が決まる過程を分析する。

物の受け渡しは、物を渡す者、すなわち、渡し手になる者が一人に決まらなければ、多くの場合、円滑に達成できない。一方、日常的な物の受け渡しでは、渡し手になる者が明らかにされないことも少なくない。たとえば、「箸とって」という依頼は、箸を渡す者を明らかにしているとは限らない¹。それでも多くの場合、そうした物の受け渡しは混乱もなく達成されるようである。以上より、日常的な受け渡しでは、実際に受け渡しがなされる前に、渡し手になる者が必ずしも明示的ではない何らかのやり方で事前に調整され、物の受け渡しが滞りなく達成されているのではなかろうか。

2. データと分析方法

本稿では、日常会話をビデオ収録して集めた受け渡し事例の中から、旅行中の夕食前に生じた事例を取り上げる。なお、この旅行は、本研究とは独立して準備・実施されたものである。ここで、とくに食事の準備場面を取り上げたのは、調味料や食器など、受け渡されうる物が多いためである。加えて、渡し手が依頼がされた時点では決まっておらず、実際の渡し手がその後の相互行為を通じて決められる場合が少なからず存在しているためである。会話の参与者は同じ研究室に所属する大学生男女8名(男性5名、女性3名)で、そのうち1名は第一著者である。夕食が行われた部屋の模式図を図1に示す。ただし、図1が示するのは後掲する図2の01行目前後での状況であり、参与者の位置は会話の進展に伴い変化していた。

前節で述べたような発話や身体動作の調整は、実際の会話データから発話や身体動作を書き起こして作成したトランスクリプトの、マイクロ分析を行う研究によって明らかにされてきた。マイクロ分析には、数秒間のうちになされる調整を分析の焦点とする場合(e.g., 坂井田・諏訪, 2015)と、それよりは長い時間を通じてなされる調整を分析の焦点とする場合(e.g., 城・細馬, 2004)とがある。ただし、こうした分析の時間幅の違いは、対象とする現象の違いによるものであり、相互行為を成り立たせるための調整を明らかにするという点では共通している。本稿も同様の立場から、渡し手が決められる過程を検討する。

分析のため、事例の発話をアノテーションして作成したトランスクリプトを図2に示す²。なお、発話に加えて、より詳細な身体動作についても記したトランスクリプトは後の分析の中で示す。

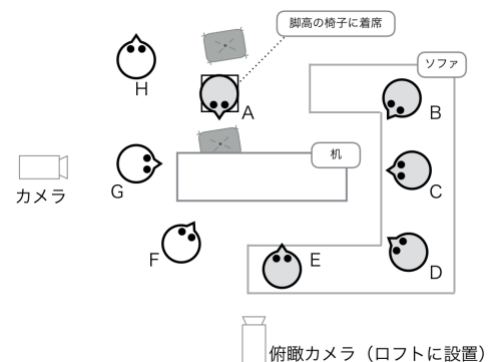


図1 部屋の模式図(図2の01行目前後)

立位の参与者は白塗, 座位の参与者は灰塗り。

A, B, E, G, Hが男性, C, D, Fが女性

¹ 2者間会話や、視線を利用した場合など、発話以外によって、渡し手が明確になることもある。

² トランスクリプトで用いた記法は、発話は西阪(2008)を、身体動作は坂井田・坊農(2016)を、それぞれ参考とした。

3. 分析

本稿で分析する事例は、共に夕食をとろうと、鍋に火が通るのを皆で待っているときのやりとりである。Fを除く参加者たちは机を囲むように位置している。分析では、まず以下の4点を示す。

- (1) 01 行目は、探していることの示しによって、他の参加者が援助を申し出る機会を用意していること。
- (2) 04 行目と 06 行目は、Fのみならず周囲の参加者に座れる物（座布団）を見つけたことを表明していること。
- (3) 04 行目および 06 行目には座布団の近くにいる参加者の反応が見込まれること。
- (4) 04 行目および 06 行目が他者に座布団が座れる物の候補として適切かどうかの判断を委ねていること。

そして、(1)～(4)の分析に基づき、渡し手（援助者）が決まる過程で、渡し手になりうる者が絞り込まれていくという可能性について議論する。

3.1 援助を申し出る機会の用意

01 行目において、Fは自身が「座椅子的なサムシング」を探していることを示している（図2-1）。これは、「座椅子」そのものを探しているよりは、「座椅子」を含めた、座ることが可能な物を探していることの示しとして聞かれる。

01 行目におけるFのふるまいは、特定の参加者に対して、援助を直接依頼するものではない。一方で、他の参加者らにとって、Fの発話は、援助を申し出る機会を他者に用意する発話とみることもできるだろう³。

当然、援助の申し出のための機会が用意されたからといって、他の参加者は必ずしも援助を申し出る義務を負うわけではない。ただし、先に述べたように、本事例は皆で共同で食事をしようとしている場面である。このことから、Fが座れる物を探していることは、Fのみにとっての問題というよりは食事に関連した問題として理解可能になっている。なぜならば、参加者のうちの誰かが着座できないことは、食事を開始できないという点で、参加者たちに共有されうる問題であるためである。したがって、Fの発話は単に援助の申し出の機会を他者に用意するというよりは、他者に援助を依頼するものに近いと考えられる。

以上の分析の傍証として、直後の02行目では、BやCが座布団の置かれている場所の周辺に視線を向け、何かを探すようなふるまいを示していることが指摘できる。加えて、02行目では、「みんなで写真撮ろう」とDが01行目とは無関係な誘いをしているため、01行目が他者に援助を依頼するものではなかったようにも思える。一方で、02行目につづく03行目では、02行目への反応はなく、Fが「高いよね(。)(それ)」と、Aが座っているような脚高の椅子では、食事をするには適さないのではないかと、確認を求めている。このことから、01行目がFのみの問題というよりは、この場の参加者たちに共有されうる問題として扱われていると分かる。

以上より、01行目は単なる探していることの示しではなく、さらに、援助を申し出る機会を用意しているというよりは、他者に援助を依頼するものであったと言える。

3.2 座れる物の候補を見つけたことの表明

04行目でCは、指差しとともに「これじゃない?」と述べている（図2-2）。まず、以下の2点から04行目の発話は、01行目に対する応答と聞かれる。第1に、01行目の援助の依頼に対する直接の反応は、まだ誰からもなされていない。第2に、04行目では切り詰められた表現が用いられている。つまり、「これじゃない?」は、01行目に依存して「これが座椅子的なサムシングじゃない?」と理解される発話である。以上2点より、04行目は、01行目に対する反応と聞かれる。

→01 F: なんかさ:座椅子的な:さ:(。)(サムシングないのかな
02 D?: みんなで写真撮ろう
03 F: 高[いよね(。)(それ)
→04 C: [これじゃない?
05 : (1.3)
→06 G: 座椅子(。)>それは? そ↓れ<(。)>それぞれ<
07 C?: °()°
08 G: (こ)れがさ: [色んなと]こに散らばってる=
09 D?: [()]
10 H: =接続できたわ ((部屋のWiFiに接続を試みていた))
11 B: (>ちょー 待っ<)↑(。)(こ[れか
12 F: [ありが] と=
A_Hand: -差し出す----->↑-ホールド----->↓-受け渡し->
F_Hand: -差し出す----->↑-ホールド----->↓-受け渡し->
13 A: =()Σ
A_Hand: -受け渡し->Σ-引き戻す->
F_Hand: -受け渡し->Σ-引き戻す->

図2 トランスクリプト

→01 F: なんかさ:Δ座椅子的な:さ:(。)(サムシング+ないのかな
A_Hand: Δ-拍手 ----->+
F_Gaze: -床を見渡す----->
02 D?: みんな B などで写真 f 撮ろう
B_Gaze: -机-->B-A の足元----->
C_Gaze: -A の足元----->f-座布団->
F_Gaze: ----->
03 F: 高[いよね#(。)(それ)

図2-1 トランスクリプト

³ 05 行目は、この点で Kendrick & Drew (2016) が言うところの「援助のリクルートメント」に類似している。ただし、本稿は、依頼者以外の参加者たちのやりとりに焦点を当てるものであるため、詳細な議論は見送る。

上記のことから 04 行目は、F が探している物の候補を見つけたことを F に示しているものとして理解可能である。しかし、04 行目において座布団に向けていた視線を、直後の 05 行目冒頭において、C は指差しを保持したまま、A/G へと向けている。つまり、デザイン上は、F のみに向けられていた発話に反応する者として、A/G を見込んでいるような振る舞いを C はしている。このことから、04 行目の発話は座れる物の候補を F のみに示したのではなく、座れる物の候補を見つけたことを周囲の参与者（少なくとも A/G を含む）に表明した発話と理解できる。

ついで、06 行目で G は、座れる物の候補を見つけたことを表明している。06 行目は、行頭の「座椅子」という語、および、04 行目に関しても述べた、切り詰められた表現を用いている点で、01 行目への応答と聞かれる。一方で、G は F は視線を向けてはおらず、代わりに、A に身体の正面を向け、彼に近づきながら話している。このことから、06 行目は、座れる物の候補を F のみに示したのではなく、座れる物の候補を見つけたことを周囲の参与者（少なくとも A を含む）に表明した発話と聞ける。

以上より、04 行目と 06 行目では、01 行目への応答が期待される位置で、01 行目の産出者である F のみではなく、周囲の参与者たちに向けて、座れる物の候補を見つけたことの表明がなされていたと考えられる。

3.3 物の近くにいる参与者からの反応の見込み

04 行目および 06 行目のような気づき（見つけたこと）の表明は、たとえば気づきの共有のような反応を必ずしも強く見込めるものではない（串田ら, 2017）。ただし、座れる物の候補を探しているという文脈を考慮すると、気づきの共有にせよ、指示対象である座布団を手取るにせよ、04 行目および 06 行目の表明に対するいずれかの参与者からの反応を C および G は見込めるであろう。ただし、そうした見込みは、すべての参与者に等しくできるわけではない。C や G の表明に対する反応を産出することを見込めるのは、C や G が指している物に気づくことを見込める参与者であろう。

それでは、ここで座布団に気づくことを見込める参与者とはいかなる参与者であろうか。1 つには、探し物に近い参与者であれば、そうでない参与者に比べて、物に気づくことを見込めるであろう。04 行目直後の C の目線と、06 行目の G の身体の向きが、自身よりも座布団の近くにいる参与者に向けられていたことも、この分析の傍証となる。

以上より、04 行目と 06 行目は、探し物の近くにいる参与者の何らかの反応を見込める発話であったと考えられる。

3.4 座れる物かどうかの判断を委ねること

04 行目と 06 行目の共通点として、疑問の形式が含まれることと、座布団を取りに行こうとしていないことが身体的に示されていることを指摘できる。04 行目と 06 行目には、共に断定を避ける表現（「じゃない？」と「それは？」）が含み込まれている。すなわち、C と G は、座布団が座れる物であるかどうか、判断を差し控えている。また、04 行目と 06 行目で C と G は座布団を取りに行こうとしていないことが彼らの身体によって示されている。まず、04 行目で C は指差しと座位を維持している。つぎに、06 行目で G は座布団に歩み寄りをするが、指差しの手形を解いたり、かがみ込んだりせずに、指差しと立位を維持している。以上より、C と G は、座れる物の候補を見つけたことを表明しつつも、それが座れる物として適切かどうかの判断を他者に委ね、また、自身では取りに行くことを控えていたと考えられる。

3.5 渡し手になりうる者の絞り込み

3.2～3.4 節より、04 行目の C および 06 行目の G は、探し物の近くにいる参与者に向けて、座れる物の候補として座布団が適切な物かどうかの判断を委ねていたと言える。ここで 04 行目と 06 行目の差異として、反応を見込める者の数が異なっていたことに着目したい。04 行目の C の発話に反応が見込めるのは、参与者の中でも、とくに座布団に近い A と G である。そして、06 行目の G の発話に反応が見込めるのは、発話に G よりも物の近くにいる A である。すなわち、04 行目から、06 行目にかけて、座布団が座れる物として適切かどうかの判断を委ねられた者が絞り込まれていたと言える⁴。

⁴ H も座布団の近くにいたが、他の参与者に背を向け、携帯電話の設定をしていたため反応を見込める者からは除かれるだろう。

```

03  F: 高[いよね#(.) (それ)
→04  C:  [これじゃない?
C_Gaze: ----->
C_Hand: ー座布団指差し開始ー>
F_Gaze: ーGー>#ーC 指差しー>
G_Gaze: ーCー>
05  : (0.6)B (0.2) * (0.5)
C_Gaze: ーA/Gー>*ー座布団ー>
C_Hand: ー指差しホールドー>*ー指差し撤退ー>
G_Gaze: ー>BーC の指差し先ー>
→06  G: 座椅子 #(.)+そΣそれは? $>そ↓れ<(.)* >それぞれ<
A_Foot: ----- *ー座布団寄せるー>
C_Hand: ----->$
G_Gaze: ー座布団ー>
G_Hand: ー降ろす>#ー座布団指差し開始>$ーホールドー>
G_Foot: ーΣー座布団の方へ歩き出しー>
F_Gaze: ー+G の指差し先ー>

```

図2-2 トランスクリプト

上述の判断に関連して、03 行目で、A と G が座れる物を探すことの当事者として位置づけられていることにも触れておこう。まず、F は、03 行目で確認を求めている。このとき、F の視線は G に向けられている。加えて、「高いよね(それ)」という発話は、「それ」という聞き手の側に属する物を指す表現からして、A にも向けられている。したがって、03 行目で、F が確認を求めている参加者は、A と G のどちらか、もしくは両方である。このことから、F は、座れる物に関する判断を A と G に仰いでいたと言える。すなわち、A または G は、ある物が座れる物として適切かどうか判断しうる者として、F によって扱われていたと言える。

ここで、座布団が座れる物として適切か判断することは、F に座布団（適切な援助）を提供するために必要であることに着目したい。このことから、F に援助を提供しうる者は、上述の判断が可能な者だと言えるだろう。

以上より、F に座布団を提供しうる者、すなわち渡し手になりうる者が A に絞り込まれていたと考えられる。

4. 考察

本稿で取り上げた事例には、参加者が座布団が座れる物として適切かどうかの判断を他者に委ね、渡し手になりうる者が絞り込まれていった結果、受け渡される物の近くにいる参加者に渡し手が決まるという過程が見出された。以下では、渡し手になりうる者が「絞り込まれた」点と、「受け渡される物の近くにいる」参加者に絞り込まれた点とに着目して考察を行う。

まず、渡し手になりうる者が「絞り込まれた」点について述べる。この過程を通じて、渡し手が決まることは、ともすれば、冗長にも思える。たとえば C や G は、「座布団を取ってあげて」というように F に座布団を渡すことを A に直接要求することもできただろう。このことについて考える手がかりとなるのが、会話分析の領域で検討されてきた「あからさまな要求 (explicit request)」についての知見である。Pomerantz & Heritage (2013) によれば、会話の参加者たちは、あからさまな援助の要求をすることを回避するため、相手から援助の申し出を引き出すやり方を、しばしば用いるという。本稿の事例における「絞り込み」による渡し手の選択も、そうしたあからさまな要求を回避するためのやり方なのかもしれない。

つぎに、渡し手になりうる者が「受け渡される物の近くにいる参加者」に絞り込まれた点について述べる。既に述べたように、受け渡される物の近くにいる参加者は、遠くにいる参加者に比べて、より物に気づくことが見込める参加者であると考えられる。ただし、受け渡される物の近くにいるからといって、その参加者が必ずしも渡し手になるとは限らない。たとえば、物の近くにいる、その物に気づけたとしても、それを実際に渡すことができないという点で、幼児や、高齢者、負傷者は、実際の渡し手にはなりにくいだろう。このことを考慮すると、単に受け渡される物への近さのみに基づいて、参加者たちが渡し手を選んでいいるとは言い難い。

そこで本稿では、単なる物理的距離ではなく、受け渡される「物へのアクセシビリティ」という観点を提案したい。ここでの物へのアクセシビリティとは、以下の3つの可能性を含むものである。第1に、物が環境中にあることに気づく可能性である。第2に、たとえば本事例の場合は「座ることが可能」であるというような、その物が参加者たちに提供する価値に気づく可能性である。第3に、渡すという身体動作の実行可能性である。本稿の事例に即して言えば、A は、座布団の位置に気づくこと、F にとってその座布団が座れる物であることに気づくことが、十分に見込める参加者だと言える。同時に、A は、F に座布団を渡せる距離にいるため、渡すという動作を十分に実行可能な参加者でもあると言える。加えて、04 行目や 06 行目のように断定を避ける表現は自身を十分なアクセシビリティをもたないことを示す表現と考えられるだろう。以上のような、参加者間での物へのアクセシビリティの偏りを背景として、渡し手になる者は調整されているのではないだろうか。

本稿の事例のみから、前節で述べた物へのアクセシビリティを背景として、参加者たちが渡し手になる者を選択していると、強く主張することは難しい。今後は、より多様な参加者を含む、多様な場面の受け渡し事例を収集・分析していく。

参考文献

- 城綾実・細馬宏通 (2015). 多人数会話における自発的ジェスチャーの同期 認知科学, 16 (1), 103-119.
Kendrick, K. H., & Drew, P. (2016). Recruitment: Offers, requests, and the organization of assistance in interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 49 (1), 1-19.
串田秀也・平本毅・林誠 (2017). 会話分析入門 勁草書房
西阪仰 (2008). 分散する身体 勁草書房
Pomerantz, A., & Heritage, J. (2013). Preference. In Sidnell, J., & Stivers, T. (Eds.), *The Handbook of Conversation Analysis*, pp. 210-228. Chichester: Wiley Blackwell.
坂井田瑠衣・坊農真弓 (2016). 人はいかにして「歩き出す」ことを了解するのか—展示物解説活動に埋め込まれた移動— 日本認知科学会 第 33 回大会論文集, 189-194.
坂井田瑠衣・諏訪正樹 (2015). 身体の観察可能性がもたらす協同調理場面の相互行為 —「暗黙的協同」の組織化プロセス— 認知科学, 22(1), 110-125.